

07年マアジ

単位：数量、1000トン、価格、円/kg

年	数				量					価 格					ムロ			
	漁獲	養殖	産地	輸 入	東京			消費支出 生(ダ)	在 庫	加工 塩干	産 地	輸 入	東京			消費支出 生(円)	漁 獲	
					生鮮	冷凍	塩干						生鮮	冷凍				塩干
18	167	2	109.1	47.8	20.1	0.6	9.3	1,724	35.5	50.8	179	129	478	379	527	1,720	23.7	
19	169	1.7	92.9	45.0	20.6	0.4	9.6	1,795	34.6		189	152	485	415	497	1,750	24.6	
%	101	85	85	94	103	70	103	104	98	0	106	118	101	109	94	102	104	

漁獲量と資源

19年の漁獲量は17万トンに終わり、前年を更に下回る水準で平成11年以降の平均20-25万トン台をかなり下回る低水準であった。

本年は山陰を始めとした日本海側での漁獲が好調であったが、特に主力の東シナ海での漁獲が伸びなかった。

主力の東シナ海及び日本海沿岸で主に漁獲される対馬暖流系群の資源量は、1973～1976年の23万～32万トンから1977～1980年の12万～17万トンに減少した後、増加傾向を示し、1993～1998年には、51万～56万トンの高い水準を維持した。1999年以降はそれよりやや低く、2001年には28万トンにまで減少したが、その後増加して、2004年は54万トンであった。2005年以降は減少に転じ、2006年は39万トンであった。再生産成功率は1990～2000年まで変動しながら減少傾向を示したが、2001年に急増した。その後は再び減少傾向にある。親魚量と加入量には正の相関があり、親魚量が少ない年には高い加入量が出現しない傾向がある。

また太平洋系群は1982～1990年代半ばまで資源量は増加し高位水準であったが、1996年の160千トンを頂点に減少した。2000年と2001年はやや増加したが、2002年以降は100千トン前後を推移している。2006年の加入尾数は低く9.2億尾となっている。

以上のように何れも資源水準は中位であるが減少傾向にあり、親魚量の増加・確保は、資源の安定的確保には極めて重要であるとともに、また当歳魚の漁獲の減少があれば、漁獲量の増加が期待できるとされている。

ムロアジ類

大中型まき網のムロアジ類(マルアジ除く)のCPUEは、1990年を境に増減を繰り返しながら減少傾向にあり、2000年以降でみると横ばい傾向にある。マルアジCPUEは増減を繰り返しながら推移し、近年では2002年に比較的高い値を示したものの、2003年以降減少し、2005年以降は増加した。2000年以降でみると横ばい傾向にある。ムロアジ類およびマルアジCPUEの相乗平均値は2000年以降おおむね一定の水準を保っている。最近20年間で見るといずれも低水準にある。

(近年MAX：H2年 10.9万トン)

産地水揚量と価格（４９港）

海 域 別 水 揚 量				月 別 漁 獲 量				月 別 価 格 推 移			
海域	18年	19年	前年比	月	18年	19年	前年比	月	18年	19年	前年比
東シナ海	58.3	43.1	74	1	9.7	6.5	67	1	124	142	115
山陰	35.8	44.7	125	2	10.4	7.9	76	2	114	167	146
豊後水道	1.2	1.3	106	3	9.4	7.3	78	3	158	203	128
九州東岸	4.7	2.6	55	4	8.9	10.6	119	4	198	171	86
薩南	2.1	1.9	90	5	10.8	9.8	90	5	230	243	106
太平洋	11.6	12.1	104	6	9.5	10.0	105	6	246	215	87
その他日本海	3.6	4.4	121	7	7.6	7.8	103	7	306	203	66
				8	6.6	6.5	98	8	239	218	91
				9	7.3	6.9	94	9	210	187	89
				10	9.8	5.1	52	10	123	219	178
				11	9.4	8.0	85	11	126	130	103
				12	8.2	5.8	71	12	131	172	131
計	107.6	92.1	86	計	179	189	106				

19年のマアジの水揚量は、9.3万トンで前年(10.9万トン)を引続き下回った。

九州西方海域では、春の盛漁期（４～６月）に山も少ない漁況に終止し水揚げも伸びず、しかも、秋口から冬場にかけても前年同様総じて少なく、水揚げは前年をかなり下回った。

また、山陰沿岸では春の盛漁期（４～６月）の九州とは逆にまとまった漁獲が連日みられ、秋・冬漁も10月が低調であったのを除くと比較的好調に推移した。その結果、昨年をかなり上回る水揚げとなった。

太平洋側では薩南海域で前年をやや下回ったが、その他の海域では前年を上回る漁であった。

魚体は、東シナ海では100g以下のアジが25%(前年40%)(70g以下の豆アジは全体の7%で前年23%)で、本年は中・大アジの占める割合が高く、昨年より魚体の大きいアジの漁獲が多かった。

山陰沿岸では、依然、魚体の大きいマアジは少なく周年豆アジ（0～1歳魚）主体で推移し、依然型の大きいアジは少なかった。

価格は、189円で水揚げの減少を反映し引続き前年（179円）を上回った。

輸 入

19年のアジの輸入は、4.5万トンで5～7万トンの近年の範囲を依然やや下回る水準であり、前年(4.8万トン)をやや下回った。

本年は、オランダ1.3万トン(前年:1.6万トン)、ノルウェー0.81万トン(前年:0.85万トン)、アイルランド0.5万トン(前年0.5万トン)で今年はEU諸国からの輸入がやや減少しているのが特徴。また韓国も0.5万トンで前年(0.4万トン)をやや上回ったが、台湾は0.2万トン前年の0.4万トンを下回った。

本年は、引続き国内漁が低調であったこともあったが、北欧でのアジ価格の高騰もあって輸入量も減少した。

価格は、152円で前年(129円)をやや上回った。

在 庫 量

本年の在庫量は、3.5万トンと前年（3.6万トン）を下回った。
これは、国内生産量、並びに輸入の減少を反映したものである。

消費地入荷量と価格

19年の東京消費地の入荷量は、生2.1万トン（前年2万トン）、冷0.4千トン（前年0.6千トン）であった。塩干物も9.6千トンで前年（9.3千トン）をやや上回った。

本年の1世帯あたりの消費支出は数量が前年をやや上回り、金額は単価高を反映し前年を若干上回った。

価格は、生485円（前年478円）、冷415円（前年379円）、塩干497円（前年527円）で、塩干開きを除くと浜値や輸入価格の上昇を反映し、何れも単価アップが目立った。